



からしだね

2018年12月号

(544号)

キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/>



本号の記事の主題など

ノノイ・プラザ神父による巻頭言
「刷新の時」 (Japanese and English)
ようやく晴天に恵まれて大掃除が完了
七五三の祝福
死者を思い起こし、祈りました
10月のお泊り会はハロウィン・パーティ
マザーテレサの講話が聞けます
社会活動委員会からの支援先紹介(その3)

大人の日曜学校だより
みんなの談話室
「殉教者を想い、共に祈る週間」を読んで
デニス神父様のメガネ
吉村昭 『破船』
南アフリカへクリスマス・カードを送りました
12月の教会カレンダーへの追加

巻頭言

刷新の時

ノイ・プラザ神父

きょう(2018年12月2日)からカトリック教会では新年の典礼暦がはじまります。クリスマス当日にイエスの生誕をおごそかに祝うため、このさき4週間にわたるアドベント(待降節)の準備をはじめるとあたり、ご生誕が重要であるばかりか、おそらくもっと大事な主の再臨、究極の来臨を母なる教会はわたしたちに思い起こさせるのです。

こんなわけで今日の第一朗読と福音はともども、ある「訪れ」について語ることになります。主の来臨は歴史の終わりとなるかもしれません。しかし、人の子イエス・キリストへの信仰にゆるぎなく寄りすが私たちにあって、それは新たな始まりとなるでしょう。

預言者エレミアの言葉「主は言われる、イスラエルの家とユダの家に語った約束をわたしが成就する日がくる。その日、そのとき、ダビデの家からわたしは正義の若木を芽ばえさせる。彼に公正と正義をこの地でおこなわせよう。」この箇所をよんだわたしたちは、きょうの福音でルカの語ることがよりよく理解でき味わえるようになります。「そのときひとびとは、人の子がカと大いなる栄光をおび雲にのってやって来るのを見る。」

未来のこのできごとがいつ起きるか、わたしたちはもちろん知らない。だからこそ、キリストのおおいなる生誕の時期ばかりか究極のイエス再臨に備えるためにも、アドベントの季節、わたしたちは寛大でよく祈り、心配りを怠らないよう勧められるのです。再臨のとき、わたしたちはこの世でどのように生きたかによって審判を受けるでしょう。神の国に入る最善の保証となるのは、あらたな刷新された暮らしぶりなのです。

刷新といえば、これは御受難会第47回総会テーマでもありました。御存知のとおり、ローマで開催された総会にわたしは公式派遣メンバーのひとりに選ばれましたから、10月は留守でした。10月19日、わたしたちは創設者「十字架の聖パウロ」を厳粛に祝いました。前日の晩、十字架の聖パウロ聖堂に集まり、典礼にもとづいた「御受難会聖年」の準備段階がはじまりました。聖堂で晩に礼拝がとりおこなわれ、創設者の遺物を飾った聖像が祝福を受けたのです。聖像は世界を旅するでしょう。御受難会会員のいる日本にもやって来ます。

ところで御受難会聖年というのは御受難修道会創設第3回百周年記念(1720-2020)をお祝いするためです。ヨアヒム・レゴ御受難会総長の言葉によれば、このお祝いは「わたしたち御受難会員が言葉と行ないによって示さなければならない聖霊の賜物を祝うことであり、焦点となるのは制度ではなくて聖霊の賜物を活かすつづけ進展させることです。個人として、また共同体の一員としても御受難会員たるわたしたちが刷新されるようにという観点で、この聖年が祝福されるように希望します。」

喜ばしいアドベントのこの季節をむかえ、心を開きあおうではありませんか。御受難会の仲間として聖霊の賜物をわかちあう池田教区のわたしたちは、個人と共同体生活の刷新という恩寵をみんなひとつになって求めましょう。ともにいてくださる神の霊が、この季節、新たな一年の典礼暦をおしてわたしたちの心を動かしてくださいように。

12月のガラスケースのことば
立て 輝け 光が来られる

イザヤ60・1

Heading
Article

A TIME OF RENEWAL

Nonoy Plaza CP、

Today (December 2, 2018) begins another liturgical year in the Catholic Church. As we begin this four-week Advent preparation for the solemn commemoration of the birth of Jesus on Christmas day, our mother Church reminds us not only of the importance of His birth for us but also, and perhaps more importantly, of Jesus' second and final coming.

It is for this reason why both our first reading and the gospel talk about a certain "coming". His might be the end of history; but definitely it is going to be a new beginning for all of us those who held on steadfastly to their faith in the Son of Man, Jesus Christ.

The prophet Jeremiah says: "The days are coming, says the Lord, when I will fulfill the promise I made to the house of Israel and Judah. In those days, at that time, I will raise up for David a just shoot; he shall do what is right and just in the land." We use this reading to make us better understand and appreciate the meaning of what St Luke says in today's gospel: "And then they will see the Son of Man coming in a cloud with power and great glory."

Of course, we don't know when will this future event take place. That is why during the season of Advent, we are encouraged to be generous, prayerful and vigilant as our way of preparing ourselves not only for the great season of Christmas but also for the eventual second coming of Jesus. In that second coming of his, we will be judged according to how we lived our life here on earth. A renewed life is our best guarantee for entering into God's kingdom.

Talking about renewal, this was incidentally, the theme of our 47th General Chapter. As you all knew, having been chosen as one of the official delegates for this said Chapter in Rome, I was away during the month of October. In the 19th of the said month, we observed the solemn feast of our founder St. Paul of the Cross. But during the previous evening, we also all gathered in the chapel of St Paul of the Cross in order to liturgically open the preparatory phase of what we call the Passionist Jubilee. There, during the evening liturgy, the special icon with the relic of our founder was blessed. It will travel all over the world, including here in Japan where Passionists are also found.

This Passionist Jubilee, by the way, is our way of celebrating the third centenary (1720-2020) of the founding of the Congregation of the Passion (the Passionists). In the words of our Fr. General, Joachim Rego, CP, this celebration "is a celebration of the charism that we must proclaim with words and works. The focus should be "keeping alive" and promoting the charism and not the institution.... I hope that this jubilee will be celebrated in the light of our renewal as Passionists, both personal and communitarian."

As we enter into this joyful season of Advent, let our hearts be open. As this parish shares our charism as Passionists, let us all then be one in asking for the grace of renewal for our individual and community life. May the Spirit of God be with us touch our hearts during this season and throughout the ne liturgical year.

ようやく晴天に恵まれて大掃除が完了

9月30日に予定されていた大掃除は、台風24号の接近のため、繰り延べとなった。その後、床磨きなど部分的に掃除をしながら、10月28日の主日に、窓ふきを中心として聖堂やカール記念館の大きかりな掃除がおこなわれた。

聖堂は男性、カール記念館は女性、カール記念館二階は子供たちの担当である。キッチンの片付けや布団干し、さまざまな個所の洗いや設備の磨き上げ、庭の掃除、不用品の分別など、各自が自主的に取り組み、和やかな協力のもと、皆がよい汗をたっぷり掻いた。



死者を思い起こし、祈りました

死者の月の第一日曜日(11月4日)、主日のミサにおいて神に仕えて亡くなったすべての人を思い起こし、祈りました。司式した島基幸神父は、2017年12月以降に帰天した方の名前を読み上げられましたが池田教会関係者はFr國井健宏と4名の信徒でした。その後に、聖堂横の納骨堂の74小室の全ての死者に聖水を掛けて祈りました。

また、聖堂祭壇の向い正面(以前には洗礼盤が置かれていました)には、Fr國井、Frマックゴワン、Fr松本の写真額などが並べ置けました。



納骨室で全ての死者の名を読む島神父



聖堂祭壇の向い正面には

七五三の祝福

11月11日の主日に、ノイ神父様が七五三を迎えた子供たちを祝福なさいました。男児女児合わせて6人が祭壇前に進み出て、信徒のあたたかい拍手に包まれながらノイ神父様の祝福を受け、千歳あめをもらいました。かわいい子供たちが神様の愛に育まれて、すくすくと成長しますように。



モチノキ(雌)、12月、池田市

10月のお泊まり会はハロウィンパーティー

10月のお泊まり会は、今年も恒例のハロウィンパーティーで盛り上がりました。カール記念館の食堂はいつもとは一変し、カボチャの置物やガイコツの人形などで飾り付けられました。このガイコツなどの飾りの一部はデニス神父様が集めておられたもので、毎年ハロウィンのたびに登場するお馴染みのものです。食事は日生中央教会の方々を中心に用意してくださり、これまた恒例の「魔女のスープ」(コウモリの羽に見立てたキクラゲが入ったシチュー)や、色とりどりの寒天が入ったデザートなど、子どもたちも大喜びのメニューでした。

食事の後は中高生が2階に準備したお化け屋敷に挑戦! 「怖くなかったー!」、「面白かったー!」という子どもたちもいる一方、怖くて泣いてしまった子もいましたが、最後はお菓子をもらってみんな笑顔になることができました。年に一度のちょっと特別なお泊まり会、子どもから大人まで、楽しいひとときとなりました。

日曜学校サポーター



マザー・テレサの講話が聞けます

マザー・テレサ(コルカタの聖テレサ)が1984年に三度目の来日をなさったとき、麴町教会で「平和を求めて」と題する集いが開かれました。その際にマザー・テレサの講話の通訳をなさったのが、国井健宏神父様です。マザー・テレサの素朴で靈感に満ちた声と、国井神父様の朗々とした声が入っている感動的な講話をお聞かせください。

国井神父様は病床で、見舞われたYさんから集いの模様を録音したカセットテープの存在を知り、もう一度聴きたいと思われたのですが、CD制作が間に合いませんでした。皆様にもぜひマザー・テレサの講話を聴いてもらいたいと望んでおられました。



教区黙想会などで黙想指導された司祭様方の許可を得て、昨年度から講話をCDに起こして広報委員会が貸し出しを行ってきました。Yさんの提供されたマザー・テレサの講話のCD(Fr.国井による通訳付き)をカール記念館ホールなどに場所を移して貸し出しを行う準備中です。

支援先紹介その3 社会活動委員会

今回は、2011年に起きた東日本大震災で被災された方々を支援している2ヶ所を紹介致します。

(1) ふくしま共同診療所

原発事故・放射能被曝による健康被害(小児甲状腺がんなど)から福島の子どもの命と健康を守ろう、との呼掛けで基金が設立され、2011年12月に開院しました。

現在も全世代に対して受検を呼掛け、甲状腺がんの早期発見に精力的に取り組んでいます。

福島に住む人は、先ず避難。それが出来ない人は保養がいる。そしてやむを得ず避難・保養が出来ずに病気になるれば医療と言う考え方で県民の健康を守るために診療が行われています。

(2) 公益財団法人 みちのく未来基金

こちらは、全ての寄附を震災遺児の学費として使われています。

2018年8月時点で総額約39億円の寄付が集まり、これまで727名の子どもたちに学費を支給し、既に380名を越えるみちのく生が社会に旅立ったとのこと。

それぞれの支援先から、通信、お便りなどが届いています。お聖堂のうしろ、カール記念館和室手前の所に置いてますので、1度お手にとって、ご覧下さい。

大人の日曜学校だより

10月28日 福音の分かち合い

「先生、目が見えるようになりたいのです」

マルコ 10・46～52

この週は一部大掃除があり、大人の日曜学校はお休みでした。そこで、お伝えする分かち合いの模様こそありませんが、ミサで読まれた福音について少し述べてみたいと思います。

ストーリーは、テイマイの子、バルティマイというひとりの盲目の物乞いが、イエスの一行に「ダビデ

の子イエスよ、私を憐れんでください」「(私は)目が見えるようになりたいのです」そう叫んで近づこうとし、いったんは周囲から叱られるのですが、イエスは「あなたの信仰があなたを救った」とおっしゃり、するとその盲人の目は見えるようになったという話です。

少し話は変わりますが、もうお亡くなりになられた森毅という数学者がいて、ある時森さんが、TVのインタビュー番組で「人間にとって幸せとは何でしょうか？」と訊かれたのに対し「調子がいいこと」とお答えになっていたのを私は覚えています。

“羽目を外す”という言葉がありますが、辞書を見ると、“調子に乗って度を越すこと”という意味のようです。私は人間にとって“調子に乗ること”はじつは大事なことだと思っています。よく“あの人は調子がいい”というと、ちょっと批判的な言い方として捉えられがちですが、むしろバルティマイのように、度を越していると叱られようが、その思い切った行動によってイエスの目にとまり、目が癒されるまでになった、そのことほうが結果的に良かったということもあります。あるいは、彼は本当は調子に乗っていたのではなく、真剣だったかも知れません。何れにしても、人間、時には度が過ぎて羽目を外すくらいのことがあったっていい、そんなことはないでしょうか？ その意味で今の社会は人の失敗に対して、逆に不必要なくらいに敏感です。

ある人は「人は何のために生きるのか？」という問いに対して「自分の利益を最大化し、自分の不利益を最小化するため」と答えていましたが、確かに、それもそうかも知れません。でも、それだけではミスの許されない、息詰まる切迫した人生になってしまいますし、本来の人のあり方や人間らしさは失われるでしょう。それよりも、教会という存在自体、意味の無いものになってしまう気がします。ですので、時には失敗があっても、それをスルーできるきつぷの良さが大切。その点では何か一見、無駄だと思うことでもやってみる。そうすると、少々の不利益や不本意も許せるようになるものです。また、そこで得たちょっとした気持ちのゆとりが逆説的ですが、めぐりめぐって自分へのプラスにもなるように思います。

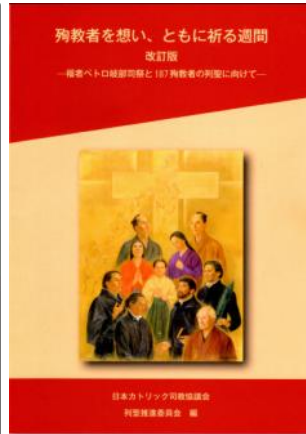
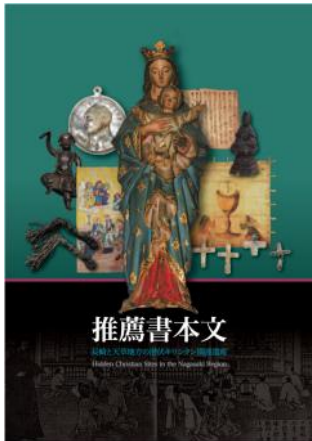
研修委員会

みんなの談話室

「殉教者を想い、共に祈る週間」(改訂版)

読んで

T.O.



左：昨年、文化庁がユネスコに提出した世界文化遺産登録の推薦書。

右：本年7月、日本カトリック司教協議会列聖推進委員会が配布した小冊子。

わたしたちが棲む近畿は日本史を振り返っても最も安全な地域として多くの人々が暮らしてきたと感じていたのに、今年はその安心感を揺るがすような度重なる台風の直撃や震度6にもなる自身などの異常現象に見舞われました。その7月上旬、ユネスコ世界遺産委員会は、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界文化遺産登録を承認し、1614年の徳川家康の切支丹禁教令から明治初期(1873年)まで及んだ長い禁教時代にあつて殆んど司祭不在であった日本における他国に類を見ないキリスト教の信仰の証しが世界的に認めることを公にしたのでした。しかし、元来は個人的な信仰が理不尽にも為政者によって発せられた禁令に対して、魂と肉体を抑圧されたカトリックの司祭や修道者、伝道師(同宿)などの信徒が強く拒んだために、多くの殉教者が生まれたという世界に類を見ない事態となった事実を忘れることができません。

秀吉による突然の切支丹禁令(1587年)によって明石城主の職を解かれ、主に従った高山右近は家康によって家族ともども荒れる大海をケソンに配流されて帰天し、昨年に、列福されたのは記憶に新しいことです。

1597年には大阪と京都の教会堂などに居た6人の宣教師と20人の信徒が秀吉の命令で捕縛され、長崎の西坂で磔の刑を受けて殉教し、フランシスコ会の推挙によって1862年に列聖されました。その磔刑までの経緯は若桑みどり著「クアトロ・ラガッツイ」(集英社文庫、2008年)や片岡弥吉著「日本切支丹殉教史」(智書房、2010年)に詳しく記されていて、教会堂で働いていた老若の邦人信徒が磔刑を受けるわが身よりは未洗の家族を思いやった姿から偲ばれる信仰の強さと謙遜さに心が震えました。また、1633～1637年に長崎で殉教したドミニコ修道会に所属するトマス西司祭と15殉教者も1981年にフィリピンで列聖されています。

また、日本カトリック司教協議会自身が推進して、2008年にペトロ岐部司祭と187殉教者が列福されました。日本カトリック司教協議会(列聖推進委員会)は直ちに同年に小冊子「殉教者を想い、共に祈る週間」で神だけを頼りにした生き方を続ける直向きさを証した人々の列聖に向けて歩み出しました。この7月に発行された改訂版(残部僅少)を池田教会の聖堂入口で見つけ、改訂版に加えられた以下に記す三つの段落に時代や環境、そして人生の段階に相応しい信仰の形があるのに気が付きました。

-----殉教には迫害や死刑など残虐で陰惨なイメージが付きまとい、重いテーマと受け取られがちです。しかし、殉教とは恐ろしい拷問に耐えて死んだというところに偉大さがあるのではなく、また現代のわたしたちも殉教者の死を顕彰するものではありません。殉教者から学ぶべきは、迫害に直面し、最後に殉教者になった人たちの信仰です。したがって、殉教者の死に方にではなく、生き方に注目しなければなりません。

2017年2月7日に列福されたユスト高山右近を通して、殉教者とは神のために勇敢に散った英雄というより、むしろギリシャ語のmartyr「あかし人」という原意のとおり、神の愛のあかし人であることが明瞭になりました。流罪の地マニラへの旅の間、右近は自らの信仰の堅固さを示したいという誘惑に勝ち、「殉教への積極的な望み」と「ただ、ゆつくりと死へ追いやられる状態にさらされること」との違いを悟り、「継続する殉教」を完成しました。こうして、右近が神をあかしするのではなく、右

近の生涯と死をとおして神が自らをあかしされる殉教のかたちが鮮明に記憶されました。

今年明治維新から150年。福者ペトロ岐部司祭と187殉教者も、禁教下で250年間潜伏し、脈々と信仰を伝えた数世代の信徒たちも、いのちをかけて信仰を生きました。そして、再来日を果たした宣教師を迎え、再び激しい迫害にさらされた長崎浦上の信徒たちは、四番崩れと流配によって、また信仰のためにいのちを落としました。その同じ信仰の血が、現代のわたしたちに脈々と流れていることを忘れることはできません。今、わたしたち日本の教会は、ザビエルの来日から始まったキリシタン時代、そして250年の禁教時代、さらに明治の再宣教から現代にいたる日本のキリスト教史のなかで、神が日本のために備えてくださった驚くべき救いの歴史を振り返えるときです。-----

昨年3月発行の「からしだね」525号において、M.H.さんは米国人マーティン・スコセッシ監督が撮った遠藤周作の「沈黙」を観て」と題した文を原作の踏み絵を踏む場面でのキリストの母的なことば「踏むがいい」で締め括っています。遠藤周作の別な作品「銃と十字架」(中央公論社1982年、小学館2015年)には、父的な強さを持って生きたペトロ岐部司祭の生涯を描いたと自ら記し

ているのでやや涼しさを帯びてきた9月に読み比べてみました。

ペテロ岐部司祭は國東半島で半農半漁を営み、戦になれば浦部水軍に加わる父の剛毅な性格と渡海する冒険家の気質を受け継ぎ、単身で海路・陸路を繋いでマカオ・ゴア・エレサレム・イスタンブールを経由してローマまで赴いて、念願の司祭叙階を果たしたのでした。直ちに、日本へ帰国し、既に潜伏している少数の司祭たちに加わり、日本人信徒に赦しの秘跡を授けようとした強さを持ち合わせていた故に、穴吊の極刑にもペテロ岐部司祭は耐えられたのでしよう。

徳川幕府の禁教政策の下で250年間潜伏して信仰が7世代に亘って継続したのは殆ど奇蹟であろう。それが可能にした条件は一体何であろうか？上智大学の川村信三著「時のしるしを読み解いて」(ドン・ボスコ社、2006年)や文化庁がユネスコに提出した世界文化遺産推薦書の第2章、片岡弥吉著「日本切支丹史」に幾つかの興味ある提言が書かれている。しかし、残念ながら歴史家の仮説の段階のように私には感じられる。その「日本切支丹史」を読めたのは明治初期の浦上第4番崩れで流配の悲劇を経験された祖父母を持つR.H.さんのお陰である。感謝。

デニス神父様のメガネ

T.K.

先日メガネのフレームの歪みを直してもらおうと、ガストの近くの「メガネの光陽」に立ち寄りしました。歪みがひどかったため二日ほど時間が欲しいと言われたので、私は「いいですよ。どうせ教会へは毎日に行くので通り道ですから。」と答えました。するとご主人が「え、あのマリアさんの教会ですか？」と聞かれたので「そうです。」と答えたところ、「デニス先生はお元気ですか？」と聞かれました。

私がアメリカで亡くなられた事をお伝えすると、「そうでしたか。どうしておられるかと思っていました。」と大変残念がられ、神父様のメガネのカルテを見せてくださいました。手書きのとても分厚いもので、何と初診は昭和47年、神父様が44才の

時でした。「先生はうちが店をダイエーにオープンした時からのお客さまでした。先生のメガネはライルアンドスコット(LYLE&SCOTT??英国製)でした。それに、先生は安藤百福さんよりも(百福さんは昭和49年)早くうちに来てくださった。このカルテは捨てませんよ。」と懐かしそうに話してくださいました。

私は嬉しくなり、神父様の写真をお見せすると「これは店に貼っておきます！」と言われたので、後日写真を少し大きくして持っていきました。ご主人は「この辺で先生を知らない人なんてありませんよ！先生は有名人ですから！それにうちのメガネをかけてくださっている！」と大満足なご様子でした。ああ、デニス神父様がここにも生きておられる！とつづく神父様の大きさを感じた出来事でした。

私が「メガネの光陽」に行ったのには理由があります。それは、デニス神父様がガラシア病院に入院されていた時、娘と一緒に神父様をお訪ねしたところ、神父様が「今から池田に行くよ！」とおっしゃったのです。「え？」とお尋ねしたら「メガネの調子が悪いので教会の近くの【光陽】へ行くよ。」とおっしゃったのです。その時の事を思い出して初めてお店を訪ねたのですが、まさかご主人とそんなお話が出来るとは??。

これも神様とデニス神父様のお導きでしょうか。神に感謝！



吉村昭 『破船』

直

立てつづきに吉村昭をよんでいる。10年まえ、79歳で鬼門入りしたこの作家はドキュメンタリー風戦記物で世評たかい。昭和19年レイテ沖で撃沈された戦艦武蔵、その前年広島呉軍港沖で謎の爆沈をとげた陸奥、さらに日露戦争中、対馬沖で連合艦隊に完敗したバルチック艦隊をえがく『海の史劇』など、いづれも足で稼いだ歴史的事実に基づく冷静な筆致が持ち味である。

小説『破船』について書いてみた。おのれの生ぬるい怠惰な暮らしぶりを反省させるほど、生きることへの緊張感がみなぎった作品だから。読了して思わず背筋を伸ばした。

江戸時代、戸数わずか数十の北の漁村が舞台。豊かな漁場があるわけではない。背後に山がせまっているため耕地もない。だから村人の生活はいつも饑餓線上。そんな村にとっての救い主は「お船様」である。厳冬期、海が荒れると村人は浜で塩をつくる。大がかりなたき火がたかれる。だが、ほんとうの狙いは塩そのものではなくて沖を通る船なのだ。たき火を人家の灯りと思い込ませ、岸边にちかい岩礁に誘いこみ、座礁させて積荷をかすめとる。遭難させるのである。乗船者は皆殺し。米、酒、着物、日用雑貨など村人にとってはまぶしいものばかり。「お船様」は生の楽しみ、福の神だった。

あるとき、赤い絹の着物に身をつつんだ骸(むくろ)が20体ほども載せられた船がたどり着く。怪しんでいた村人たちだったが、高価な着物に幻惑され、けつきよく洗濯したのち女性たちに分配する。数日後、村人のあいだに天然痘が蔓延。赤い着物は疫病よけだったのである。全滅を避けるため罹病者たちは山に追放される。一カ月とはもたないだろう。村人は半分以下になった…そこで物語は終わる。

ささやかな喜びをもたらすはずの「お船様」が、急転直下、恐ろしい「はやり病」で村人を苦しめる。皮肉と言うには、すさまじすぎる。無辜の船人たちが殺しつづけてきた報いにしては厳しすぎるではないか。そうした罰を与えられるには、村人たちは善良すぎるし、あまりに貧しくつましい。かれらの暮らしを見ていると、生きることの真剣さと恐ろしさに慄然とする。船人たちを皆殺しにするのも、そうしないと生きていけないからだ、と言外に作品は語っている。

日本が「福祉国家」となって、最低限の生活を保障する制度が曲がりなりにも整ったのは、ついこのあいだである。祖先たちは、ながいながいあいだ、「お船様」を待ちつづける村人たちのように暮らしてきたに違いない。貧しさは諸悪の根源である。

南アフリカへクリスマス・カードを送りました

M.K.

今年もたくさんの心のこもったカードをありがとうございました。南アフリカの人々に、素敵な「心のプレゼント」となってほしいと思っています。これからも南アフリカの子供たち、そしてエイズに苦しむ方々のためにお祈りください。

会計報告	送料(2個分)	3,260 円
	お菓子代	950 円
	雑費	90 円
	計	4,300 円

12月の教会カレンダーへの追加

12月6、13、20、27日(木)	10:30
聖書百週間	
12月21日(金)	14:00 ~ 16:00
福音書を学ぶ会	
12月2、9、16、23日(日)	13:00 ~ 14:30
信仰入門	
12月24日(月)	19:00 ~
主の降誕夜半のミサ	
12月25日(火)	10:00 ~
主の降誕ミサ	

1月3日のミサは7時からと変更されました

三が日のミサは1日～3日に開かれます。2018年度行事予定表にあるミサの開始時刻は3日間とも11時となっていたのですが、3日に限り7時に変更されました。

典礼委員会



ときときペアを組む

表紙の写真について

カール記念館のロビーに飾られている、このご降誕の絵は、1992年5月にカール記念館落成記念としてS.M.さんが寄贈されたものです。奥さまの明子さんのお話では、ポーランドへ旅をされた際に、ワルシャワの旧市街にある国営ギャラリーで購入されたということでした。古い教会の壁に何枚か連ねて飾られていた中の一枚だと説明を受けたそうです。制作者はわかりません。ポーランドの教会で、何世紀にもわたって地域の人たちが親しく見上げていたこの絵が、遠い日本の池田教会に落ち着く場所を見つけたのだと思うと、いとおしさを覚えます。11月19日に帰天したS.M.さんのために黙祷いたしましょう。

広報委員会

宝塚黙想の家から 黙想会のお知らせ

■ 日帰り黙想会

■ 週末黙想会



以上の12月の黙想会はお休み

■ 韓国語による聖書の勉強会

12月はお休み

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎797(84)3111

編集後記

11月は死者の月で帰天されて主と相見え、あなたがたの平和とこの世のわたしたちを主に、取りなしを願った。一方で、信者のお子さんの幼児洗礼や信者の結婚式を祝福できた喜びの月でもあった。

先月末にあった教会外の多くの方々で賑わったバザーの記事の殆どの記事を前号に掲載したために、本号は記事や報告の件数は少なくなると予想していました。実際には全くその予想は外れ、3ヶ月ぶりのノイ神父様はじめ多くの方からの寄稿や報告などが締め切り日を過ぎても届き、最後まで誌面の編成替えを余儀なくされたほど記事や報告の本数となりました。

「からしだね」が多様な方がたからの寄稿が掲載される場となって、小教区内で吉報も訃報も共有・共感されるのを願っています。

インマヌエル